

### Rhif 3. 水谷 宏：‘Manawydan’の発音について

去る11月12日（土）に開催された第2回研究例会において、カムライグ語の固有名詞のかな表記についての概略を発表した。時間の関係で詳細については別に機会を待たなければならなかったが、ここでは、「マビノーギ四枝」*Pedeir Keinc y Mabinogi* に出てくる‘Manawydan’の読み方と、かな表記についてまとめてみた。

カムライグ語音声学は、例えばイギリス英語や日本語の音声学に比べると、今後の研究成果に期待するところも多いようである。‘Manawydan’の綴りには、語中の *-wy-* を *-wi-* と綴るテキストと、同じ語中の子音 *-d-* を *-dd-* と綴るものがあり、中期カムライグ語での綴字法上の未発達の状態がわかる。

中期カムライグ語での綴字の習慣では *-wy-* / *-wi-* の *-y-* または *-i-* で表されている母音は、「閉じ中舌母音（緩み母音）」であり、国際音標表記では [ɨ] と表記されるのである。一方、中舌母音の [ɨ] と [ə] とは、中期カムライグ語では共に *-y-* の文字が当てられて、*mynydd* [mənɨð] 「山」と綴られる (D. Simon Evans, 1970, *A Grammar of Middle Welsh* pp. 1-3 参照のこと。Evans の表記では、[ɨ] は [i] と表記されている)。また、二重母音と解釈しても、*-wy-* は [uɨ][uə] が考えられる他、[wɨ] もあり得るのである。いずれにしても、かな表記では「ウイ」「ウア」のいずれもが可能となる。

語中で綴られる子音 *-d-* については、中期カムライグ語では [d] 音を表し、*-t-* は、語中・語尾ともに [-ð-] [-ð] (例：nid [nid] ‘not’; bluytin [bluðin] ‘year’, Jarman, A.O.H., 1982:3/6 および 55/13, awit [auð] ‘desire’, 同書 28/23) を表し

ていて、最も早期の写本 *Llyfr Du Caerfyrddin* (c. 1200) の綴字法上の特徴となっている。ところが、14世紀の特徴は、「初めの頃の *Llyfr Gwyn Rhydderch* においても、また、同世紀終わりごろと思われる *Llyfr Coch Hergest* においても、語尾の [-d] は -t で表わされ、[-ð] は -d で表わされるのが特徴となった (D. Simon Evans, 1970:7)。ところが語中においては、-d- は [-d-] と [-ð-] の両方の音を表わしていて、'Manawydan' 'Manawyddan' と綴られている。上記の Evans, 1970:7 の子音表では、[ð] を「歯間音」Interdental とし、[d] を「後方歯音」Postdental と分類しているが、現代のカムリの人々の発音習慣ではこの両音はともに「歯音」dental として調音されてるのが普通である。従って、両者の相違は、舌先が上歯に接触している「閉鎖音」の [d̠] か、上歯と舌先の間摩擦が生じる間隙がある「摩擦音」の [ð] ということになる。いずれも「有声音」であり、「呼気圧」は「無声音」に比べれば低く、「軟音的」(lenited) の調音になる。以上の考察から、かな表記では、「マナウイダン / マナウイザン」「マナウアダ / マナウアザン」の4通りが可能になる。